

## 技術史研究(者)案内書\*

—USA, FRG—

種 田 明\*\*

USA: Svante Lindqvist, *THE TEACHING OF HISTORY OF TECHNOLOGY IN USA. —A Critical Survey in 1978*, (Royal Institute of Technology Library, S-100 44 Stockholm, Sweden) Uppsala 1981 / ISBN 91-85212-71-7 / Report Trita-Hot-5003 1981, 139 p.

FRG: (Berichte zur WISSENSCHAFTSGESCHICHTE Organ der Gesellschaft für Wissenschaftsgeschichte e. V.), *Naturwissenschafts- und Technikgeschichte in der Bundesrepublik Deutschland und in West-Berlin 1970—1980*, (Akademische Verlagsgesellschaft Athenaion, Postfach 1107, D-6200 Wiesbaden) Wiesbaden 1981 / Sonderheft 1981 (SCH-RIFTEN DER GEORG-AGRICOLA-GESELLSCHAFT), 163 S.

### 『アメリカ技術史教育』

ある国を鳥瞰して論ずるとき、同国人よりも外国人による方が適切かつひろがりあるものとなる例は、アレクシス・ド・トクヴィルの『アメリカにおけるデモクラシー』(政治学)ほか分野を問わず輩出しており、Lindqvistもその類である。彼は1985年1月より王立技術研究所助教授(科学技術史)、またウプサラ大学でも科学史研究に携わる新進気鋭の研究

者の一人である [1984年度 “Johan Nordström's and Sten Lindroth's Prize to a young scholar for a distinguished work in history of science” (5000 SEK) を受けた。受賞対象となった研究は *Technology on Trial: The Introduction of Steam Power Technology into Sweden, 1715—1736*. (Almqvist & Wiksell) 1984, 392 p. ISBN 91-22-00716-4 であった]。ポールヘムヤスウェーデンボルクの伝統を受け継ぐ Lindqvist が、1978年に ŠHŌT (The Society for the History of Technology, アメリカ技術史学会の略称) の招待で渡米し、20大学約30人の代表的な技術史研究者と面接インタビューをおこない、資料調査と文通を加えて上梓したのが本書である。

調査が1978年、出版が1981年、そして紹介が調査時から7年も経過しているけれども、「しかしながら、現在の名簿 directory を呈示しようというのではなく、[技術史の——種田注——] 教育の視座 range and scope の代表的構造図 representative picture を表示することがねらい」(p. 26) であり、「結論の殆んどは依然維持できると思う」(‘85. 6. 12. 付種田宛私信) のである。1978年 SHOT の会員数は約1100で、同年年次大会(Roanoke)には175名ほどが「出席」している——Lindqvist は SHOT 会員中約350名ぐらゐが技術史家であ

\* 1985年10月12日受理

\*\* 玉川大学文学部

ろうと推定している (p.15)。たしかに技術史は科学史・経済史・考古学・人類学・社会学等々とオーバーラップするので、アカデミック・ディシプリンとして定義づけることに関して「bogus discipline (David F. Noble, 彼自身 MIT 教授/技術史ノなのに)」とも「bona fide field (Merritt Roe Smith, Ohio State Univ.)」 (p.13) とも、見解が分れているのだからこの推定もやむをえまい。しかし一種の納得できる独断であろう。

三大中心地として Univ. of Pennsylvania, Univ. of Delaware, Smithsonian Institution (NMAH=the National Museum of American History) が挙げられているが (p.32-36), 彼自身も指摘し (p.14) かつ日本を含めて世界的に技術史研究は、機関よりむしろ“個人”に負っているところ大なのである。その意味から本書には14氏のポートレートが収められている: Eugene S. Ferguson, Delawara Univ. / D. F. Noble / M. R. Smith / George Basalla, Delaware Univ. / Richard H. Schallenberg, Virginia Polytechnic Inst. / Melvin Kranzberg, Georgia Inst. of Techn. / Robert P. Multhauf, Smithsonian Inst. / Derek J. de Solla Price, Yale Univ. / David A. Hounshell, Harvey Mudd College / W. David Lewis, Auburn Univ. / Edwin T. Layton, Univ. of Minnesota / Carroll W. Pursell, Jr., UCSB / Raymond H. Merritt, Univ. of Wisconsin-Milwaukee / John M. Staudenmaier, Univ. of Pennsylvania の各氏である。ということは、本書はみごとな『留学案内書』にもなっているということである。(Appendix III には Ph.D. Requirements at the Univ. of Delaware, [p.94-96] がある)。

“Technology and Culture” (SHOT の機関誌, Chicago 1960 ff.) 創刊以来約25年, 「技術史の今日的状況は科学史の20年前に似ている」 (p.23) といえようか。しかし「Lynn White, Jr. は一つのモデルを確立したが、彼

はいかなる学派も形成していない」 (Brooke Hindle, Smithsonian Inst.) 「Lynn White, Jr. はかなりの所まできたが、彼はほとんど院生を育てていない too few graduate students」 (D. A. Hounshell; p.15) という言辞からも明らかのように、技術史研究の世代交替期にアメリカはさしかかっている、*history* への傾斜を深めつつも SHOT 内には多くの見解を蔵しているのである。

本書には上記のほか、教育の実態 [Teaching, p.37-50; カリキュラム, p.51-71; 評価, p.72-79; Attitudes towards the courses, p.80-83; 技術史教育の重要性, p.84-87; 結論 (John Doe, Kalamazoo Polytechnic Institute への手紙, という形式をとっている), p.88-90; 付録 Appendix I-X, p.91-139] が把握できる構成と場合によっては教育・研究機関の住所/責任者名が注として記されている。その意味で本書は高校・工高・高専・大学・大学院で“技術史”を講じている方々にとって参考・指針となるものが満載されている本とってよいであろう。

『西ドイツ (及び西ベルリン) 科学史・技術史 1970-1980』【ここでは技術史に限る】

各州、各大学で異なる科学史・技術史=所属学部・講座科目各称・担当者・前史 Vorgeschichte・課程および学位取得可能性 Studiengang / Prüfungsmöglichkeiten・関連している学術雑誌、財団や博物館 etc. の情報・図書館について・学位論文や (上記担当者の) 発表論文リスト=を、一望一冊におさめたのが本書である (Stand WS 1980/81:1981年3月現在)。ただし、当然ながらこの5年間に変動 (新任、移籍、死去、引退) があり、また単科大学、非常勤や文書館、私企業資料館の研究 (者) そして日本学その他のいわゆる「総合講座」所属の研究 (者) は漏れている (S.1-2, 5) [特記すべき損失は Albrecht Timm (5.11.1981), Friedrich Klemm (16.3.1983) が鬼籍に入

ったことである]。

ドイツの技術史研究は申すまでもなく200年以上の学史(研究の歴史的発展過程)を有している。ところが東西ドイツ成立(1949)以後は、東独(Hans Wußing, *Dreißig Jahre Wissenschaftsgeschichte in der Deutschen Demokratischen Republik*. NTM-Schriftenreihe für Geschichte der Naturwissenschaften, Technik und Medizin 16 (1979), H. 2)をはじめとする東欧のマルクス主義に基く技術史(生産諸力史 *Geschichte der Produktivkräfte*)の研究の方が研究者/機関・論文数において西独に先んじてきたのである(S. 4)。このような状況に至った原因の一つには、西ドイツにおける技術史研究の中心地の拡散=1960年代より諸大学、ドイツ博物館、VDI(ドイツ技術者協会)、DFGやMPI(マックス・プランク研究所)のような公的研究機関(州立博物館を含む)等々を挙げることができよう。そして研究者数も評者(種田)の推定を加えても約50名(足らず)であり、(S. 11~154)、今日なおマイナーな領域であると言えよう。

だが観点を変えれば次のようにも言える。ドイツには幸いにも、アメリカのように技術史を科学史の一部とみなしたり、「技術史」という科目名称を使いながら「科学史」を教えたりということはない。さらに、[1980年に Technisches Landesmuseum Baden-Württemberg an der Univ. Mannheim 設立と関連して C-4 Prof. (=旧称でいえば正教授)がおかれた](S. 5; FAZ, 9. 11. 1979, S. 27 “Historisches Museum für Technik. Museumsprojekt des Industriezeitalters”; Süddt. Zeitung, Ostern Apr. 1979, S. 11 etc. 参照) たしかにマイナーであっても歴史研究

に不可欠な領域であることは否定できないものとなっている [例えば西ベルリン・旧日本帝国大使館を修復し「日欧比較文化研究所」として活用する原案に“技術史”が入っている=大西健夫編『現代のドイツ』12(ドイツと世界), 三修社 1985, p. 219(松田智雄論文)]。内田星美氏(日本産業技術史学会会報「さんばく・3」'85. 6., P21.), そして本年('85) 8月の西独歴史学会に出席した寺尾誠氏(慶応大・中世独経済史)の指摘のように、欧米では老大家の時代から若手中堅の専門家の時代へと急速に交替しつつあり、西ドイツの場合も本書(特にその発表論文リスト)から若手の成長を窺い知ることができるのである。

上記2冊から評者(種田)が主張したい点は次の2点である。第1に技術史には国際的な視野が望まれる——D. J. de Solla Price のように「人は中国、インド、イマラムそして初期アメリカの諸文化を含めて考察すべきである」(『アメリカ技術史教育』p. 43—44)——こと。第2に技術史をディシプリンとして確立する方向へ私達は努力すべきである——『技術と文明』(Vol. 1/1) 岡本真理子論文レジュメは邦語としてはともかくも海外へのアピールとしては失格である——こと [英文の修正・補筆を求めなかった編集委員の責任である]。技術史は科学史・産業考古学・社会史さらには歴史学と深く連携をたもっているし、今後ますます歴史学からの期待は大きい。そしてそれゆえにこそ、パイオニアとしての私達の任務は重要となってくるのである。

(1985. 10. 8.)